

7. 地方病性牛白血病 (EBL)農場清浄化を目指した 牛白血病ウイルス (BLV) 対策 (第一報)

大分家畜保健衛生所

○病鑑 長岡健朗、病鑑 御手洗善郎

【はじめに】 EBLはBLVにより起こされる伝染病である。我が国では過去10年の間にEBLの発生頭数は年々増加しており、近年では若齢牛での発症も問題となっている。本県では特定疾病リスク低減対策事業としてハイリスク牛の摘発を中心としたEBL対策を行ってきたが、平成26年より全頭遺伝子検査による農場清浄化を目指すこととした。BLV遺伝子検査陽転を防ぐことにより、年月をかけて陰性群を増やし、最終的に清浄化を目指すこの取り組みについての現状と展望を報告する。

【清浄化へのスキーム】 対象農場については、まず、全頭遺伝子検査を行い、陰性群と陽性群に区別する。子牛または導入牛を陰性群に入れる場合は移動前検査を行う。移動前検査で摘発できなかった陽性牛を排除するため定期的に陰性群全頭検査を行い、陰性を維持する。陽性牛については基本的には積極的な淘汰は行わず、出荷や廃用により農場からいなくなるまで飼養する。陰性群の清浄性確認全頭検査は労力・コストがかかることから、移動前検査では摘発できない陽性牛摘発のため、移動後フォロー検査法を確立する。

【検査状況】 平成25年度の全頭遺伝子検査への移行後、現時点（平成27年10月）で12農場の全頭検査を行った。遺伝子検査の陽性率は0%~80.5%であった。このうち3農場は清浄化を断念、以前より清浄化を目指していた1農場を含め、10農場で清浄化を継続中。

【今後の取り組み】 陰性群・陽性群の分離方法（別牛舎、物理的障壁、通路のみ等）が異なり、また農場主に意欲があり清浄化が達成できると見込まれる農場を設定し、分離方法の有効性を検証する。また、移動後フォロー検査の実施方法に農場内に存在するBLVの性状（envRFLP型、tax遺伝子型、pol遺伝子変異等）が影響するかどうか調べ、農場毎のオーダーメイドの検査法が適用できるか検討する。

【考 察】 県内ではBLVが高度に浸潤している農場が多く、清浄化は現実的ではないと言う声が多く、これまでもハイリスク牛の摘発と言った対策で済ませてきた。一方、近年のEBL発生増加に伴い、積極的に清浄化に取り組みたいという生産者も少なくない。今回の取り組みは農場清浄化に向けた第一歩である。現時点での陽性率や畜舎の構造等で実現可能な農場からでも早期に清浄化を達成したい。そして、その課程で得られたノウハウの蓄積により、より難易度の高い農場での清浄化を達成し、現場のニーズに応えられる様になりたい。

BLVの清浄化達成には長い年月が必要である。現場家保の熱意では継続的な対応が難しい場合もあり、病性鑑定部としても積極的に関与していきたい。さらに、徐々にハードルの高い目標をクリアしていくことが、ともすれば義務的な業務に追われがちな家畜衛生担当者の達成感につながるものと思われる。